

わたしたちの授業を紹介します

－インターンシップII－

心理学科2年

多湖雪羽(たご ゆきは) 大垣西高校

今回私は、社会福祉施設でのインターンシップを体験し、福祉の現場だけでなく企画、会議、地域活動の見学・参加など幅広い経験をさせていただきました。これまで、福祉といえは現場での直接的な支援というイメージが強かったのですが、実際には制度や地域づくり、教育や啓発活動など多面的な広がりがあることを学びました。インターンシップ担当の方の「困っている誰かのために社会をどう変えていくかをいつも考えている」という言葉が特に印象に残っており、福祉を個人への支援にとどまらず社会全体の課題として捉える重要性を感じました。

現場体験では、単に生活を支援するだけでなく、楽しみや生きがいを提供することが福祉の本質の一つだと学びました。また、アート活動や遊びを通して、自己表現や非言語的なコミュニケーションが利用者さんにとって大切な意味を持つことも実感しました。

一方で、施設の仕組みや地域の取り組みに触れる中で、制度や支援体制を整えるだけでは不十分で、地域の人々の

偏見や関わり方も改善していく必要があることに気づきました。また、同じ法人や事業所内の職員同士の共通理解や協力も不可欠であり、現場と制度、個人と地域の双方から支えることが「安心して暮らせる社会」につながるのだと思いました。

こうしたインターンシップでの学びを踏まえて職員の方々と考えを共有しながら福祉について考えを深めていく中で、「批判的な思考と肯定的な行動」という姿勢が福祉業界に限らず社会で働くうえで必要な考えだと感じました。今後も新しいことへの挑戦を続けて自分の視野を広げ、将来社会人としてどんなことがしたいのか、残りの大学生活で深く考えていきたいです。



サークル紹介 －劇団こだま－

心理学科3年

大谷和也(おおたに かずや) 富田高校

劇団こだまは、その名の通りみんなで演劇を楽しみ、ひとつの作品を作り上げるサークルです。メンバーは12人で活動しており、夏公演、大学祭公演、卒業公演の3回の公演に向け活動を行っています。

現状、担当分けしているものは、台本を書く脚本家、舞台構成を考え共有する演出家、舞台上に合った光量を調整する照明、音の効果で舞台に深みを与える音響、舞台セットの制作をする大道具小道具、そして演者。私は脚本と演出を担当する事がほとんどですが、どちらも考えなければいけないことが多く悩むことも多いです。毎公演ごとに課題が見え、頭を抱えることも少なくありません。ですが台本が完成した時、演出として演者や照明などの裏方がバチッとハマる瞬間の達成感はたまりません。舞台制作でしか得られないものがあります。各々には得手不得手があります。自分達のできることを上手く繋ぎ合わせ舞台制作をします。

そうして出来上がった各公演はYouTubeに投稿していま



発見があつてとても新鮮です。授業で、みなさんと個別にやり取りすることはなかなか難しいのですが、質問をいただいたり、レポートの内容を読ませていただいたりすると、とても素直で一生懸命な日福生の姿が垣間見えます。

学生みなさんが、大学生活の中で広く深く学び、育っていく姿を見守っていけるとよいなと考えていますし、私自身もみなさんとかかわりのなかでより深く学んでいきたいと思っています。学内で見かけたら、気軽に声をかけていただけると嬉しいです。

教員紹介 －心理学科－

福元理英先生

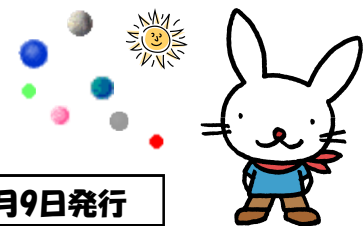
2024年度10月に心理学科に着任しました福元理英といいます。臨床心理学を専門としています。昨年度までは大学院(名古屋キャンパス)で勤務しており、美浜キャンパスにはほとんど来たことがなかったので、初めてお会いする方々ばかりです。どうぞよろしくお願いいたします。

着任してからすでに1年近く経過しているので、美浜キャンパスでの日常に、自分としては少しずつ慣れてきたつもりではあるのですが、学生みなさんとの関わりは、日々新しい

日本福祉大学

教育・心理学部ニュースレター

第26号 2025年10月9日発行



・学科長紹介

この号の主な内容

- | | | |
|-------|-----------------|----------------|
| ・授業紹介 | －音楽専門研究I－ | |
| 1 | ・ゼミ活動紹介 | －三宅ゼミ－ |
| | ・出版案内 | |
| | ・教員紹介 | －学校教育学科－ |
| | | |
| | ・ゼミ活動紹介 | －子ども発達学科 工藤ゼミ－ |
| | ・教育実習体験記 | －幼稚園実習－ |
| 2 | ・授業紹介 | －乳幼児と造形－ |
| | ・教員紹介 | －こども学科－ |
| | | |
| | ・わたしたちの授業を紹介します | |
| | －インターンシップII－ | |
| | ・サークル紹介 | －劇団こだま－ |
| | ・教員紹介 | －心理学科－ |
| | | 4 |

学科長紹介

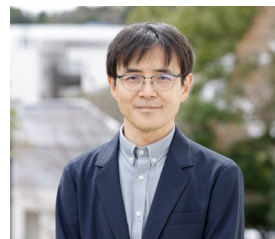
こども学科学科長あいさつ 松山有美



こども学科の学科長として、皆様にご挨拶申し上げます。こども学科では、「すべてのこどもと家族が安心して過ごせる居場所」・すべてのこどもの「声」に耳を傾け、一人ひとりのありのままの姿を包み込むことができる保育者の養成を目指しています。70年を超える保育者養成の歴史を背負いながら、現場のいま・ここにいるこどもや保育者につながる教育環境で実践力を育む学びに力を入れています。特にゼミでは、年間を通して保育所・幼稚園・施設での活動や地域活動への参加、文献輪読による理論構築を行い、4年次には、卒業研究を中心として学生一人ひとりの学びの深化を支援する体制を整えています。森の幼稚園、多文化プレスクールや子ども食堂など、教員の専門性に合わせた多様なフィールドでの活動が大きな特徴です。

卒業研究においては、これまでのゼミ単位での発表から、2024年度からは学科全体での発表に移行し、ゼミを超えた交流と保育領域への関心を深める機会を創出しています。さらに、ゆるやかなユニット制を導入し、専門性の深化を図る構想も進めています。今後も、こどもと家族のウェルビーイングを支える保育者の育成に尽力し、地域社会に貢献する活動を積み上げていきたいと思います。こども学科の教員・学生と共にこどもたちの未来を創造できることを楽しみましょう！

学校教育学科学科長あいさつ 藤井啓之 ～教育は未来をつくる大事業～



現在の少子化した日本では、労働力不足から、新規学卒者が売り手市場になっています。激しい競争もなく、それなりの収入がある仕事に就ける状況です。こうしたなかで、教員の過酷な働き方が話題とされてきたため、教員志望者が減少する傾向にあります。たしかに、新しい社会課題が生じるたびに学校で対応することが求められ、教員の仕事が増えているのも事実。また家庭や地域の教育力の低下を、学校が補わなければならないことも増えてきました。教育行政は、これらの問題について真剣に検討し、改善してもらいたいと思います。

他方で、教育というのは、未来社会を担う子どもたちを育てることを通して未来社会を建設する大事業です。教師は、日々の授業や生活指導を通して未来の社会をつくっているのです。一つひとつの授業、教師の一つひとつの言葉がけ、一つひとつの問題行動への対応の仕方のちょっとした違いが積み重なって、未来を大きく変えていきます。私は、よりよい未来をつくっていくために、学生自身のアンラーン(学びほぐし)が必要だと思っています。本学の学生も、幼いころから競争と管理の教育のなかで育ってきており、その影響を感じる事が少なくありません。教職員の皆さん、学生みなさん、そのような古い教育の衣を脱いで、新しい未来をつくる頭と心と体を一緒に鍛えていきましょう。

心理学科科学科長あいさつ 堀美和子



みなさん、こんにちは。心理学科長の堀美和子です。今このニュースレターを手にとってくださっている方々に、ご挨拶できることをうれしく思います。さて、ご存じでしょうか。心理学科は2004年に社会福祉学部心理臨床学科として産声をあげました。2008年に子ども発達学部にも、そして2020年に現在の教育・心理学部心理学科へと、様々な改良を重ねながら続いてきました。ですから2025年度は人間にすると21歳。みなさんと同じ大学生の年齢であり、そろそろ卒業後の進路を具体的に考え始めるころですね。心理学科には卒業はありませんが、皆さんが卒業後より成熟した成人として一步を踏み出すように、学科としても多くの学生の皆さんのニーズに応えられる、より成熟したものにしていきたいと考えています。ただし、教職員だけではそれはかないません。学生みなさんと一緒に成長していきたいと感じていますし、卒業生や地域みなさんからの声もたくさん聴かせていただきたいと思います。このニュースレターが、そんな皆さんとの窓口のひとつとなれば幸いです。今後どうぞよろしくお願いいたします。

ゼミ活動紹介　－子ども発達学科　工藤ゼミ－

子ども発達学科 保育・幼児教育専修4年

山田朋佳(やまだ　ともか) ルネサンス豊田高校

私たち工藤ゼミでは、「すべての子どもの権利を尊重するインクルーシブ保育」をテーマに研究しています。その一環として運営する、地域の子ども食堂「ふらっとHOME」は、食事や遊びを提供するだけでなく、地域を通して人と人がつながれる居場所でありたいと考えています。現代社会では家庭や個人が孤立しやすいからこそ、子どもにとっての居場所であると同時に、保護者にとっても安心でき、地域の中で新たなつながりを生む場であることを大切にしています。子どもを取り巻く環境が互いに支え合うことで、子どもの権利を

尊重する社会につながると考えています。

私自身も、活動を通して「居場所とは何か」「つながりが人にとってどんな意味を持つのか」を考えるようになり、そこから多くの学びを得ています。ふらっとHOMEはまだ試行錯誤の段階ですが、地域の方々とともに、誰にとっても安心できる温かな居場所を育んでいきたいです。



教育実習体験記　－幼稚園実習－

子ども発達学科 保育・幼児教育専修4年

中川由奈(なかがわ　ゆな) 日本福祉大学付属高校

私は今回の幼稚園実習は、学校生活の集大成となる学びであったと思います。何度かの実習を経て、そこでの学びと経験から自分の目指す保育者像を確立していくことができました。私が子どもと関わる上で大切にしていることを実習中に実践し、その中で一人ひとり違う子どもたちとの関わりが新たな学びとなり、自分の中の引き出しを増やすことができました。私が幼稚園実習で印象に残ったことは、事前訪問の際、障害児の子どもがおり、「あの子は関わり方が難しいから、実習中に関われなくても悲しくならなくていいからね」と言われました。しかし、障害児に関心がある私は積極的にその子と関わりました。気持ちを受け止めることや色々な提案をしてみるなど毎日少しずつやりとりをしました。その中で気持ちを切り替えることができる声掛けや、給食を席を立たず最後まで一緒に食べられるように工夫する、気持ちが落ち着かない時は絵で伝えてみるなど、今まで自分が学んだことを活かして実践を行いました。三週間の関わりのおかげ

で、その子から遊びに誘ってくれたり、給食を私と一緒に食べたいと言ってくれたり、その子との遊びに周りの子どもたちも集まってきた、みんなで楽しそうに遊ぶ様子が見られました。一人ひとりの子どもと満遍なく丁寧に関わり、その子の良いところを見つけることや性格を理解しようとする姿勢が、信頼関係を築く第一歩になると感じました。

私は実習中、子どもたちと同じ目線で遊びを全力で楽しむことを意識して関わりました。保育者が笑顔で楽しそうにしていると、子どもたちも自然とそのような雰囲気になっていくと感じています。これからも、子どもたちの言動や行動の背景を理解しようとする姿勢を大切にしながら、笑顔あふれる楽しい保育者を目指して経験を積んでいきたいです。今回の実習で得た学びや気づきを今後に活かし、一人ひとりに寄り添った保育を実践していきたいと思います。

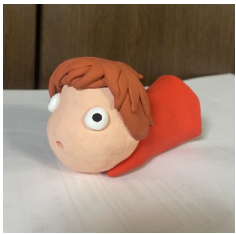
授業紹介　－乳幼児と造形－

子ども発達学科2年

驚見紅葉(すみ　くれは) 日本福祉大学付属高校

乳幼児と造形(演習)では、粘土や色紙、絵の具などを使って作品を作ったり、子どもの絵の特徴や芸術家について学びました。例えば粘土で作品を作る場合でも、どの素材の粘土を使うとどんな形にしやすいのかと考え、重さや質感、乾燥する速さなど実際に触りながらたくさん作品を作りました。特に印象に残っているのは、小麦粉から練って作った小麦粘土でお弁当を作ったことと、陶芸家でもある江村先生に教えていただきながら、土粘土で鈴の焼き物を作ったことです。どちらも色をつけて鮮やかに表現できました。そして、私が特に力を入れた作品が紙版画です。紙だけで平面に凹凸をつける作業はとても難しく苦戦しましたが、アートナイフで細かい模様を表現でき、迫力のある作品に仕上がったのでとても満足しています。私はこれまで、工作に対して「きれいに作らなければなら

ない」「みんなと同じようにしなければならない」という思いが強く、苦手意識を持っていました。しかし授業を通して、「自分の思う通りに作っていい」ということを実感でき、工作に対する気持ちが変わりました。小学校以来の粘土や工作はとても新鮮で、大人になってから改めて工作の楽しさを知ることができました。また、日常で使っている身近なものも工作の材料になることを学び、自分らしく表現することの大切さに気づくことができました。



教員紹介　－こども学科－

安田華子先生

今年度よりこども学科に所属することになりました安田華子です。保育学と乳児保育が専門です。私立保育所や自立援助ホーム、子育て支援、学童保育等、保育者として様々な職場で働いてきました。これらの経験から、同じ保育者であっても、求められる知識や技術、子どもたちとのかかわり方が違うことを学びました。また、子どもたちや保護者は、一人ひとり考え方や成育歴が異なり、一人ひとりを理解しかかわることの大切さを実感しています。もちろん、学生も同じで一人ひとり違います。そのため、学生一人ひとりと対話を大切にかかわることを心がけています。また、授業では、様々な職場での体験談や失敗談を伝えながら、実際の現場を身近に感じてもらえる

よう工夫をしています。学生と児童養護施設や乳児院等に見学に出かけ、施設の役割や保育者の専門性を学んでいます。また、学生が主体となり企画を考え、児童養護施設や子育て支援センター等で子どもたちとの触れ合いを実施しています。活動を振り返り、自分のなりたい保育者像や今後身に付けていくべきことを考えるようにしています。学生と「自分らしく」「マイペース」で、より多くの学びを続けていきたいです。



授業紹介「音楽専門研究Ⅰ(篠原眞紀子先生)」

学校教育学科2年

水野心渚(みずの　こな) 愛知工業大学名電高校

音楽の基礎的な知識や技能を学ぶだけでなく、創作活動を通して音楽の楽しさを体感することを大切にしています。メインイベントとしては、サウンドスケープや竹笛作り、グループ活動での音楽作りがあります。普段何気なく日常的に聞いている音を使って、1つの音楽にしていくというものです。1つの小さな音が大きな音楽へと生まれ変わる瞬間はとても素敵でした。竹笛作りでは、材料選びから音の調整まで試行錯誤を繰り返し、手作り楽器ならではの音色の魅力を実感することができました。自分で作った楽器から音が出た瞬間はとても感動的なものでした。グループ活動での音楽作りは、色々な音楽がうまれました。私たちのグループは、楽器初心者と上級者がいるグループでしたが実力を発揮することができ、みんなでひとつの音楽を作り上げる楽しさを、何度も感じる事が出来ました。他のグループでは、ダンス、歌、バンドなど様々な形で仲間の大切さや表現の自由さを学ぶことが出来ました。音を聴き合い、リズムやメロディを合わせながら一つの作品をつくりあげる過程は、まさに「音で対話する」体験でした。実技と創造的活動が組み合わさったこの授業は、音楽の枠をこえて、人とのつながりや自己表現についても考えさせてくれる貴重な機会となりました。



ゼミ活動紹介 三宅ゼミ

子ども発達学科学校

教育専修4年

松下要(まつした　かな

め) 半田農業高校

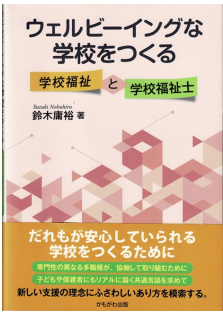
私たちのゼミでは、主に法に関わるテーマを対象としています。私たちの日常生活と法は密接な関係にあります。身の回りに溢れる物や決まりも元を辿ると全て法が関係してきます。これは教育分野でも同じことが言えます。具体的には、教師が子どもたちを指導する際の手引き書となる学習指導要領も、教育基本法や学校教育法を基に作成されています。学習指導要領を学ぶ・考えるのではなく根底にある法から学ぶことで、新たな知見が生まれてくると思います。現状の学校から考えるだけではなく、根本的な位置づけにある法の観点から捉え直すことも必要なのでは無いでしょうか。中には、教育分野ではない分野をテーマに設定して研究しているゼミ生もいます。法と聞くとなんとなく、堅いイメージがあるかもしれませんが、三宅先生の話聞けば大丈夫です！定期的に懇親会を開いてお酒とともに楽しく有意義な時間を過ごすことができます！



出版案内

『ウェルビーイングな学校をつくる 学校福祉と学校福祉士』鈴木庸裕 渚

学校教育学科1年生の教職入門で「学校福祉」という言葉は幾度も聞いていると思います。講義では「学校は子どものしあわせにいかに関心を負うのか」という問いからはじまります。今日、子どもたちのしあわせ(ウェルビーイング)に関わるのは、教師だけではなくありません。カウンセラーなどの心理職や



ソーシャルワーカーなどの福祉職もいます。もう少し広げると医師や弁護士などもあります。そういったなかで、教師の専門性とは何かが改めて問われる時代になっています。かといって教師がカウンセリングの技法や社会福祉の制度や技術を習得していけばいいということではありません。これは間違いです。教師、心理職、福祉職それぞれの専門性を練りあわせて、いかに「子どものしあわせ」を具体的に追及していくのか。平たく言うと「一緒に考える」「一緒に行動できる」関係をいかにつくり出すかです。しかし、その際、子どものしあわせをめぐる共通理解を持つことが欠かせません。ではこの共通理解とは何でしょうか。何かあったらできないあなたが悪い、家庭の問題といった「自己責任」論をいかに払拭していくのか。このことが共通の目標にされることだと思います。

教員紹介　－学校教育学科－

竹脇真悟 先生

私は36年間埼玉県で肢体不自由特別支援学校の教員として勤務し、主に障害の重い子どもたちを担当してきました。最近は人工呼吸器や酸素ボンベを装着している子も珍しくなくなりました。生命基盤の弱い子ども達なので、在学中に亡くなることも多く、担任した子どもを2名続けて見送った年もあり、そんな時は喪失感にあふれ、この子たちにとって教育の意味は何だろうかと逡巡する日々でした。

呼吸を楽にする、首を支える力をつけるなど地道に基礎体力を向上させると、子ども自身から発信しようとする力が生まれます。反応がないと思われていた子どもが、絵本などの取り組みで「もっと知りたい」と目を輝かせる、友だちにライバル心を抱いて負けまいとがんばる、学校で学ぶことは、子どもの内面を耕すことということに気づきました。

障害の重い子どもへの教育実践は現場ではまだまだ難しいとされています。しかし私は、子どもに近づこうと努力する教員の姿勢が大切なのではないかと思います。日本福祉大学で未来の教員をめざす若者とともに学びを深める中で、そんな姿勢を持つ「未来の先生」を育てていきたいと思っています。

坂野愛実先生

私の専門は教育行政学です。(※)突然ですが、この写真はどこで撮ったものでしょうか？正解は、……モンゴルです！子どもの権利を保障する法制度の調査に同行した際、撮影していただきました。モンゴルには、子どもたちを含むあらゆる人々の権利侵害に対し、個別に救済を行う機関が国から独立した形で設置されています。一方、日本において子どもの権利救済を行う機関は、地方レベルでは設置が広がっているものの、国レベルではありません。

さて、学生みなさん、一人ひとりの声に耳を傾け、侵害・不当に制約されている権利を回復するような機関があるとう感じますか？教育行政学では、権利の内実を保障する豊かな社会環境(すべての人の権利を保障し、安心できる社会環境)を創造するため、(1)権利を知り、その意味内容を深めること、(2)実社会を見つめ、既存の法制度の課題・問題を捉えること、そのためには、(3)様々な国や地方自治体の取組みに目を向けることも必要となります。豊かな社会環境を創造する力を一緒に磨いていきましょう(よろしく願います！)！

